



# 名古屋柳城短期大学

## ちゃへるにゅーす

### 第30号

2017年12月20日

来年2018年に創立120周年を迎える本学は、「愛をもって仕えよ」（ガラテヤの信徒への手紙5章13節）の聖句を建学の精神として掲げ、事あるごとにこの聖句に立ち返って歩んできました。わたしたちが一番恐れることは、この聖句を知ってはいても、その精神が時の経過とともに形骸化してきているのではないかという点です。

「愛をもって仕える」とは、具体的に何をどのようにすることなのでしょう。

1895（明治28）年、マーガレット・ヤング初代校長が40歳で勇躍、海を越えてカナダから日本に来られた後ろ盾には、この聖句があったと思われる。イエスキリストに愛されている一人の人間として、その愛を人々に伝えたい、とりわけ、日本の女性たち、幼子たちに伝えたいという熱い信仰が、彼女を具体的な行動へと駆り立てたのです。

本来、仕えるとは、神を愛し、神に仕えること、神を大切に、大事にすることです。神に造られたこの世の人々を愛し、大切に、大事にすること、人々に仕えることは神を愛することに他ならないのです。

現在、柳城での日々を過ごすわたしたちが、愛をもって仕えるために何が出来るのでしょうか。誰にでも出来ることがあります。

第一は笑顔（スマイル）をいつも絶やさないこと。笑顔は人々の心に安らぎを与えます。

以前お話ししましたが、わたしが今は無き付属御器所幼稚園児の時に教えてもらった英語の朝の挨拶の歌“Such a Happy Day”は今でも覚えています。

Such a happy day, lalala such a happy day, lalala  
I smile you. You smile me.

such a happy day. good morning. good morning.

先生方、実習生が笑顔で一緒に歌っている姿が今も胸に焼き付いています。

笑顔で「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」の挨拶を交わすことは、誰にでも出来ます。水曜礼拝の中での「平和のあいさつ」も大切にしていきたいと思えます。心から笑顔で挨拶するときに、周囲が変わっていきます。教職員・学生間は勿論のこと、学内に来られる方々に

笑顔で挨拶していますか。構内をいつもお掃除して下さっている方々に「ご苦労様です」と笑顔で挨拶していますか。NHKの朝ドラ「花子とアン」（ミッションスクールの東洋英和女学校がモデル）で、「ごきげんよう、さようなら」の挨拶がいつも交わされていたことに心なませるものがありました。

第二は感謝の気持ちを言葉と態度で表すこと。なかなか素直に「ありがとう」と言えないわたしたちですが、「ありがとうございます」「ありがとう」と言うことです。そのひと言が会う人を大事にし、大切にすること、愛することなのです。ほんのちょっとしたことにも、感謝の気持ちを表すことは相手への細やかな思いやりを感じさせますし、言われた本人が一番嬉しいのではないのでしょうか。

第三は人が避けたい、関わりたくない、嫌だなど思うことを進んですること。出来れば喜んでそのことをすることが、愛をもって仕える本当の生き方ではないかと思えます。

神社仏閣がいつもきれいに掃除されていて、ゴミひとつないことには心打たれます。天理市にある天理教本殿は玄関で履物を脱ぎ、素足で神殿に入ります。廊下の床などはピカピカに磨かれており、トイレ（手洗い）も素足のままで使用します。時々刻々、信者によって驚くほどきれいにされており、床に手を触れても全く汚れません。誰もが嫌がり、避けることを進んですることは、他の人を大事にし、大切に、愛することにほかなりません。母親・父親は幼子のおむつを替えることを厭いません。幼子が大事であり、愛しているからです。校内をきれいにすること、ゴミなどが落ちていたら率先して拾うこと、トイレなどをきれいに使うこと、汚れていたら避けて通るのではなく、次に使う人の笑顔を思い浮かべながらきれいにすること。嫌なことかもしれませんが、愛をもって仕える一番簡単で身近な行動です。それをしたとき、きっとあなたは喜びに満たされるに違いありません。

創立120周年を迎える柳城が、建学の精神「愛をもって仕えよ」を、一丸となって日々の生活の中で実現していきますよう、共に祈り求めていきましょう。

### 建学の精神を生きる

チャプレン 主教 大西 修

【5/24、6/21 観劇会】

前期の礼拝から 劇団うりんこ「ともだちや」  
— 本当の友達って・・・？ —



本学同窓会「のぞみの会」の企画として、礼拝時に「劇団うりんこ」による観劇会が行われました。同窓会長の「柳城生に、本物に触れてほしい。劇を観て心で感じとってほしい。」という願いのもとで、毎年このような学生向けの企画が行われており、今年は観劇会の講演となりました。

演目は『ともだちや』[内田麟太郎<作>、降矢なな<絵>、偕成社、1998年] 絵本でもお馴染みの作品です。では、あらすじをご紹介します。

主人公のキツネは、お客さんから頼まれると、代金と引き換えに、友達になる約束をします。「友達はいりませんか。さびしい人はいませんか。友達1時間百円。・・・。」と、のぼり旗が揺れ、キツネの威勢のいい歌が森に響きます。

依頼主の動物たちも、クマ、オオカミと個性の強い者たちばかり。ある時、キツネはオオカミから「本当の友達からお金をとるのか？それが本当の友達か？」と聞かれ、キツネは目をしばたかせて、言葉に詰まります。続けてオオカミは、「本当の友達だ。俺はともだちやなんか呼んだんじゃないぞ。」と目を尖らせて言います。そこでキツネは、初めて大切なことに気がきました。そして二人は明日も明後日も遊ぶ約束をします。

お話の終わりに、キツネはスキップしながら歌います。「友達はいりませんか。さびしい人はいませんか。何時間でもただ。毎日でもただです。」

このような絵本のストーリーを、役者さんたちが観

劇のために内容を膨らませて見事に演出されました。

学生たちは、開演後間もなくお話の世界に引き込まれていきました。舞台上の迫真の演技に身を乗り出す者、ユニークな台詞を聞いて隣の友達と思わず微笑みあう者、音楽に合わせて手拍子をたたく者・・・と、学生や教職員の目が輝いていました。また、大道具類も趣向が凝らされており、視覚的な美しさはもちろんのこと、本物の森の中に観客の私たちが引き入れられたような気持ちを味わい、舞台芸術のもつ良さを十分に堪能することができました。

「劇団うりんこ」の演技は、観客者の感性を目覚めさせてくれたのではないのでしょうか。私たちが日頃の慌ただしさによってどこかに忘れてしまっていた、あるいは消えかかっていたような「感動する心」と、誰もが子どもの時に味わった「純粹な気持ち」をもう一度呼び覚まして下さったと思います。どうもありがとうございました。団員スタッフの皆様の働きがこれからも一層祝福され、多くの子どもたちや人々にとっての喜びや希望となりますようにと、お祈りいたします。

(柴田 智世)

【7/19 山脇 眞弓】

前期の礼拝から

## 「人の心はいろいろな色に変わります」



皆さんはお気づきでしょうか、人のしぐさは、その人の心模様を映しています。

何気なく髪を抜っている人はいませんか、人は不安を感じているときに体の一部に触れることで、気持ちを落ち着かせることができるといわれています。

人前で緊張している子どもを見かけたら、そっと肩や背中 hands を当て、笑顔でうなづき、「大丈夫だよ」とアイコンタクトで子どもの緊張をほぐしてあげましょうね。

話をしているときや、人の話を聞いているときに足がカタカタと小刻みに震えている貧乏ゆすりという動きや、カチカチとボールペンをノックする人を見かけませんか。

この行動は、その話に興味がない、面白くない、早く終わらないかなあと心で考えていることが、行動として現れ、関心のなさや退屈な気持ちを動きで示しているのです。

人は、言葉で「楽しいですか」と聞かれるとその場や状況を判断し、「楽しいです」と返答します。しかしながら体の反応は無防備になりがちで、つい正直に反応してしまうのです。

子どもたちの前で、いろいろな話をする時、子どもの表情が曇ったり、あくびをしたり、手遊びを始めたり、頬杖をついたり、私語を始めたら、その話への関心の無

さが態度にあわれていると言えるでしょう。気をつけましょうね。

人前でよく自慢話をする人には、ある種の思考パターンがあります。なかには、高圧的な態度をとることにより、自分の力をアピールしているように見える人もいますが、日ごろの抑圧された劣等感を、違う場面でオーバーアクションすることで解放して、自分の弱さを隠そうとしているのです。

伝言遊びで、速さと正確さを競ったゲーム、やったことはありますよね。

これは、遊びですから文章がおかしかったり全く違う内容になっても笑いで終わります。

しかし笑えないのが“噂話”です。この場合“これは内緒よ”“秘密だけど、あなたには教えるね”という言葉が必ずついてくることです。そう言われると「人は誰かに話したくなる」のは世の常です。つい同じように周りの人に伝える。その間聞いた人の思いや聞き違えがどんどん尾ひれがつき、全く話の内容が事実とは違っていることが多いのです。つまり、相手をいじめよう、おとしめようとする場合にはとても効果的な方法だと言えるでしょう。

最後に、あなたの周りには、何かあるごとに人の悪い話を伝えに来たり、「みんなが言ってるよ」と言いに来る人はいませんか。間違った情報をあなたに伝え、あなたの意識を操作し、あなたを混乱させようとしている人です。こういうタイプはどこにでもいます。

不可思議なことは、自分の目でみて自分の耳で確かめましょう。人の言葉に振り回されない、賢い知恵ある人間になってください。これで私のお話は終わります。

(山脇 眞弓)

【7/26 田中 誠 司祭】

## 前期の礼拝から 「平和を守る」



名古屋聖マタイ教会の司祭でもあり、昨年度まで柳城短大でチャプレンを務めて下さった田中誠司祭が「平和を守る」というテーマでお話をしてくださいました。お話の一部をご紹介します。

この「平和を守る」というテーマを選んだ理由は、平和を守るために活動をされていた2名の方が最近、亡くなったからです。一人は6月に亡くなった元沖縄県知事でもあり、沖縄戦を生きのびた太田昌秀氏、もう一人は、7月に亡くなった中国で民主化運動や様々な人権活動を行いノーベル平和賞を2010年に受賞した劉暁波(りゅう・ぎょうは)氏です。特に劉氏は、人権を守るための活動によって投獄されたまま、受賞後一度も解放されることなく、肝臓がんのため亡くなりました。人が愛をもって平等に付き合えば、世の中は平和になります。大切なことは、亡くなられた両名のように「誰でも平等であるべきだ」という気持ちを持ち続けることです。

この「平等であるべきだ」という気持ちが社会に大きな影響を与えた例がアメリカにあります。一昔前のアメリカでは合法的に黒人に対する人種差別が行われていました。ホテル、レストランなどの施設、学校や図書館などの公共機関、鉄道やバスなどの交通機関で白人と黒人では分離されていました。また、分離されるだけでなく黒人への精神的・肉体的な暴力も行われていました。「I have a dream」を含む演説で有名なマーティン・ルーサー・キング牧師を中心に約50年前にこ

うした黒人差別に反対して公民権運動を起こしました。彼は活動の半ばで暗殺されてしまいましたが、非暴力による抵抗運動はその後も長く受け継がれ、ついには、黒人系のオバマ前大統領が誕生するに至りました。彼の演説の中にも息づいている「人は誰でも平等である。正しいことは正しい。」という精神を多くのアメリカ国民が持ち、共有し続けたため、昔は考えられなかった黒人系の大統領が誕生し、アメリカの社会は変わったのです。

自由にもものが言えることは日本の社会では当たり前かもしれませんが、世界には、身近な国も含め、そういうことができない国もまだあります。しかし、そんな国も周囲の国々からの影響を受けて、いつかは平等な社会が実現するかもしれません。

こういった意識を持って本日の聖書箇所(ローマの信徒への手紙12:9-15)を読んでもいいでしょう。皆さんが平等への強い関心を持ち続けてくれることに期待したいです。

(高瀬 慎二)

【9/20 後藤 香織 司祭】

## 後期の礼拝から 「バラバラの祝福」



後藤香織司祭は、聖マルコ教会と尾張旭の愛知聖ルカ教会の牧師、そし柳城幼稚園のチャプレンをされています。いつも凛としたいで立ちで、ときどき本学の礼拝の時間にいらっしゃいます。そのため、お話をうかがうのが楽しみでした。先生は次のようなお話をされました。

皆さんは「LGBT」（Lesbian Gay Bisexual Transgender）を知っていますか？ セクシャルマイノリティとも言います。皆さんの周りで、LGBTの人はいますか？私自身もLGBTです。私は、生まれたときは男でしたが、女性で生きる決心をし、今は女性として仕事をしています。現在の日本では、13人に1人LGBTといわれています。LGBTにはいろいろなケースがありますが、「性的少数者（マイノリティ）」と言われてます。世の中、人と違う人は、生きにくいもので、戸籍上は「男」なので選挙に行くと、いつも性別を問われます。しかし、一部の市町村では、役所で住民票などの書類の中の性別欄をなくすところも出てきました。まだまだ人と違うことは、住みにくくもあります。

さて今日は「バラバラの祝福」というタイトルのお話をします。本日の聖書は、「バベルの塔」です。昔、世界の人間は、同じ言葉を使っていました。人間は天まで届く「バベルの塔」を建てようとしていました。もうすぐ完成というところで、神様は一つの言葉、一つの民族ではなく、いろいろな言葉をつくり、互いの言葉を聞き分けることができないようにしました。

人間は、力を合わせてまとまって大きな仕事をしようとするとき、一人一人の個性を潰してしまい、自分の力を奢り高ぶるような方向へ行ってしまうことがあります。力を合わせることは悪いことではないのですが、ひ

とつの大きな目的のために、個性や違いを無視して画一化してしまうこともあります。

これは、人間の奢った考えに対して、神様がばらばらの言葉を与えることによって、より大きなことをするときには個性を無視することがないようにしましょうということです。このお話は、バラバラになったことで、神様からの人間への愛と祝福の導きがあるということです。

これから皆さんは、卒業していろいろな現場へ旅立って行かれるでしょう。現場で意見の違う人たちと何か作るとき、話をすり合わせながらことを進めるのは大変です。しかし違う人と意見を出し合って何かを成し遂げるといった楽しさや互いに違いを認め合っていくことは、命を光り輝かせていくことにもなります。

保育の現場では、多様性をもった子どもたちと接することになるかと思います。その中には、LGBTの子どももいるということを思い出してください。私は子どものころから、「女の子の服を着たい」といったら、「変なことは言わないで!」と言われ悲しい思いをしてみました。

皆さんが保育の現場に行ったとき、LGBTで悩んでいる子どもがいたら、そのまま受け止め、その子と一緒にどうしたいだろうと考えることができる人になって下さい。

後藤香織司祭は、こうやって話を締めくくられました。貴重なお話をいただいた時間でした。

（菊池 理恵）

【10/11 AHI巡回報告会】

## 後期の礼拝から 「AHI講演会 ミャンマーの女性と子ども」



今回で3度目となるAHI（アジア保健研修所）巡回報告会が、10月11日の礼拝の時間に、チャペルで開かれました。このAHI報告会もすっかり恒例となりましたが、今回は、2017年度研修生で、現在はミャンマーYMCA同盟の人材開発部長を務めていらっしゃるナウ・イヴ・ナン（Naw Eve Nan）さんと、AHI職員で通訳もされる中島隆宏さんをお迎えました。

“Min Ga Lar Bar”（私はあなたに、私の最高のものをプレゼントします）という温かなミャンマー語を教わったのち、イヴ・ナンさんの口から語られる現状は、実に想像を絶するものでした。今もミャンマーで続いている深刻な人身売買、児童労働、そして彼女自身も受けたという人種差別など、貧困と法整備の遅れによる問題を具体的にお話いただきました。

現在、イヴ・ナンさんをはじめとしたYMCAが行う活動のひとつに、貧困層の子どもたちと共に歌を歌ったりレクリエーションをしたりして楽しむ、ということがあります。厳しい生活環境や立場に置かれている子どもたちに、遊びを通して「ほほえむ・笑う」ということを大切にしていると教えていただきました。笑顔をつくる環境作りを行う姿は、いまここに暮らす私たちにとっても共通するものがあり、その貴さを心に受け止めました。

ミャンマーは、仏教徒が多数派の国ですが、少数民族に生まれたイヴ・ナンさんは大学卒業後、苦労した末に今のYMCAに就職しました。しかし、特にキリスト教関係の団体を望んでいたわけではなく、本当は精神科の医師になりたかったそうです。それでも、

YMCAでの活動を通じて、今ではキリスト教関係の職に就いたのは神様からの約束だったと実感していると語るイヴ・ナンさんは、「肌の色の違いや少数民族に生まれた」ということを最大限生かしてはたらく、眩しく強い女性でした。またこのひとときは、「弱い立場の人間を守る」という職能に置かれる保育や介護の道を志す本学の学生にとって、とても深い学びを得た時間でした。

（扶瀬 絵梨奈）



【10/25 村田康常】

## 後期の礼拝から 「安心しなさい」



今日の聖書箇所は、「マルコによる福音書」の第6章45-51節、不思議なお話です。

イエスの弟子たちが、夜、湖の真ん中で、手漕ぎ船に乗ったまま激しい逆風の中で進めなくなってしまった。夜が明ける頃、イエスが水の上を歩いて近寄っ

ていかれ、弟子たちの船に乗られると激しい嵐が収まった、という話です。

そのときイエスは、幽霊が来たかと怖がって叫んでいる弟子たちに、「安心しなさい。わたした。恐れることはない」と語りかけます。

激しい逆風は、私たちが生きていく中でも吹き荒れることがあります。沈まないで何とか進んでいくためには、誰かの助けが必要となるような状況に陥ることもあるかもしれません。

そんなときは、落ち着いて、まわりをよく見て、心の耳を澄ましてください。あなたのことを助けるために、荒れた水面をまっすぐに歩いてくる人が、きっといます。でも、私たちのまわりにはいろいろな人がいます。中には、甘く優しい言葉で近寄ってくるけれども、あなたを助けるよりも自分の利益を求めてあなたを利用したり、あなたを陥れようとしたりする人もいるかもしれません。また、反対に、怖そうな顔であなたに厳しい言葉を投げかけながらも、実はほんとうにあなたのことを助けて励ましたりしてくれる人もいるかもしれません。

私にとって、大学時代からずっとお世話になってきた先生が、まさにそのような怖い人でした。卒業論文の下書きを「こんなのでは全然ダメだ」と突き返され、大学院を出ても仕事先が見つからないでいたら「大学で教えていないのか？ それじゃダメだ」と怒り、ご自身の非常勤講師の職を譲ってくださった方です。そして、これ以上は続けられない、もうダメだ、と思ったとき

に、「投げ出さないで研究をしなさい」と叱って、やがて今の職場に呼んでくださいました。ほんとうに厳しくて怖い方でしたが、私を生かしてくださった方です。私にとって、一番怖い人が、一番、助けてくれた人でした。

ウィリアム・ジェイムズというアメリカの哲学者は人生を一本の鎖にたとえて、こう言っています。

「一本の鎖は、その鎖のいちばん弱い環ほどにも強くはない。そして、人生とは要するに一本の鎖なのだ。」（『宗教的経験の諸相』）

一番弱っているとき、それでも何とか砕けずに自分自身を明日につないでいくようなぎりぎりの弱さが、その人のほんとうの強さです。しかし、そういう強さは、その人の中からではなく、外から来ることが多いように思います。

あなたの人生という一本の鎖のなかで、ある環が今にも砕けそうになったときには、かならず、そのもっとも弱い環をめがけて、嵐の中を歩いて助けにきてくれる存在がいます。でも、それはときには怖そうな外見で、厳しい言葉で、語りかけてくるかもしれません。ですから、沈みそうなときや砕けそうなときには、心の耳でしっかり聞いてください。あなたを叱ったり怒ったりしているように聞こえる声が、ほんとうは「安心しなさい。わたした。もう大丈夫だ」と手を差し伸べてくれる人の声だということが、あるのです。

（村田 康常）

2017年12月20日発行 第30号  
発行所 名古屋柳城短期大学  
名古屋市昭和区明月町2-54  
編集兼  
発行者 キリスト教センター  
印刷所 日興商会